

「そうです。奥さんに亡くなられ、その後西2線1号の斉藤友吉さんの近くへ移ってそこにも長くないで息子さんの所へ行かれたようですよ。」

「長藤さんという方は今では全く忘れ去られてしまっていますが、この地帯で短期間で去った方は可成りおられるでしょうね」

「そうです。他方へ転じて成功したとか、其の後消息の分らない方が随分おられますね」

「長藤さんの奥さんは、私の寺の過去帳に大正8年6月28日朝亡法名釈妙行信女、俗名フサ行年60歳となっておりますがどういう方でしたか」

「そうです。武士の妻らしく几帳面な方で家の内外はいつも整って庭は常にホーキで掃かれ身嗜みのよい方でした。ひ弱なふうに見えよくセキをしておりました。」

後日吉家仁五郎さんの娘ヨシノさんが、屈足南町の平賀義信さんの奥さんであることを聞き訪ねました。万五郎さんの長男である喬さん（75歳）が音更町鈴蘭に健在であることが分かり親切に電話をつないで下され話すことが出来ました。

久保田春生氏を訪ねて



「久保田さんは佐幌小学校を卒業されたと聞いていますが、佐幌へこられた当時はどんな状況だったのでしょうか。」

現在清水町人舞基線18号附近に新築された家に1年前に転居してぬくぬくと息子さん夫婦、孫さん方に囲まれて楽しい余生を送っている今年76歳の同氏に向って話しかけると、

「私は4年生のとき、長尾馬一さんの住んでいた西1線3号ぶちの家に入りました。大正6年と思います。」

「大正6年というと私の生れた年ですね。あなたがこられたときは私は赤ちゃんでしたね。私のことをおぼえておられますか。」

「ハイ。私はよく父や母とお寺参りに連れて行かれたので、そしてお宅の兄さんとは同級生でしたからよく覚えておりますよ。子供は大勢おられましたね。」

「そうですよ。何せ私は9番目ですから9人居た勘定ですよ。」

「当時道路は金輪の馬車の輪型が深く切れ込んで雨水がたまり馬車とすれ違うときは可成り離れて歩きました。時々水溜りに足を落としどろだらけになって困ったことがありました。」

「久保田さんは佐幌へ来る前はどこかにおられたのですか。」

「明治41年4月郷里岐阜県から入地したのは帯広の電信通り東9条南6丁目附近です。父は農事試験場の作業員としてつとめ、母は野菜作りで収入を上げておりました。佐幌へ来たときはある程度開墾は進んでおりましたが、大木の切り株が転々とあり馬耕のプラオがそれに突きささり、台が折れて今のトラクターの故障以上に悲しい思いをしました。母は大正9年の悪性感冒で亡くなり楽しいこ